

博士論文審査の要旨

氏名 小泉 愛

本論文は、競合する情動情報を処理する際にみられる干渉について、情動情報の処理の個人差に着目し、心理学的実験による検討を行ったものであり、全5章から成っている。

第1章では、情報処理の競合、一般的な認知的情報の競合に関する研究のこれまでの流れを概観する。従来の情動情報に関する研究結果に一貫性が認められないのは、異なった情動情報に対する感度には個人差が存在するにも関わらず個人差を無視した結果であると指摘する。そこで、個人差に着目した分析を行うことによって、情動情報の処理に関しても、認知的な情報と同様に、情報に対する感度や処理の効率等の違いによって競合情報の処理が説明できるのではないかという仮説を提示する。さらに、そうした個人差に関連する要因である不安特性や遺伝要因について詳しく論じ、第二章以下の実験の導入を行っている。

第2章では、不安特性を切り口とし、個々の情動情報への感度と情動的競合処理における干渉の強さの間の関係を検討している。実験1では、競合する情動を表す表情(動画)と音声の間の干渉の強さを、また実験2では、各群における表情の動画や音声を表す感情の識別成績を検討している。実験1と実験2で得られたデータを不安特性の低い群と高い群に分けて分析した結果、干渉の強さを個々の情動情報への感度で説明することは難しいという結論を得ている。

第3章では、セロトニン・トランスポータ遺伝子多型を切り口とし、情動的競合自体における干渉の強さを、遺伝子の型が短い群(S型)と長い群(L型)の間で比較している。実験3では、競合する表情と情動語の間の干渉が遺伝子多型の違いに関連づけられること、特にS型保有者はネガティブ情報からの干渉を受けやすいことを示すことに成功している。さらに、実験4において、競合する中立情報における干渉効果には遺伝子多型の効果がないことを確認し、遺伝子多型が情動情報の干渉に選択的な効果を持つ可能性を示している。

第4章では、実験3の結果を情動情報への感度の違いによって説明することを試みている。実験5で、表情の直接評定を試みたが、遺伝子型の効果を見出すことはできなかった。しかし、実験6で、信号検出理論に基づいた実験により反応バイアスを除去したところ、各表情への感度と遺伝子型の関連、特にS型ではポジティブ情報に対する感度が高いことを見出すことができた。しかし、この結果は、実験3の結果を感度差によって説明するものでは無かった。つまり、本研究の仮説とは矛盾し、逆に、認知的な競合処理と情動的な競合処理の差異を示すものであった。

第5章では、全体の議論を総括し、情動情報への感度と、情動的競合を生じる際に受ける干渉の強さとの関係を整理すると共に、情動的競合処理、情動情報への感度、およびそれらの個人差と関わる神経生理学的機序を論じている。

本論文は、不安特性や遺伝子型の個人差に着目すれば、各情動情報に対する感度の差や情動情報間の干渉の存在を顕在化させることができることを示しており、情動研究の新たな道を開くものと言える。また、認知情報の場合とは異なり、各情動情報の感度差が干渉の関係を直接説明できないことを示しており、情動情報処理の特異性を明らかにしたという点で評価に値する。以上に鑑み、本審査委員会は、本論文が博士(心理学)の学位を授与するのにふさわしいものであるとの結論に達した。